

日本民俗学と古典文学

『枕草子』の中の仏教

高 見 寛 孝*

要 旨

日本人の精神文化の解明を目標のひとつとして掲げている日本民俗学の立場から、古典文学を研究資料として取り上げて論じた。具体的には、平安時代に生きたひとりの女性清少納言によって書かれた『枕草子』の中から仏教関係の記事を拾い出して分析した。末法思想が広まり、浄土教が特に貴族層の間に浸透したとされる時代において、『枕草子』の中に極楽浄土への往生志向は見られない。清少納言の価値観は現世利益志向である。仏教に求める清少納言のこの態度は現代日本人と変わりなく、歴史を通底する日本人の価値観だと考えられる。

キーワード 清少納言・仏教・法華八講・現世利益・観音信仰

一 はじめに

前稿^①において筆者は、『遠野物語』を文学作品と見なす昨今の風潮に対し、本来の民俗誌と見なす立場からこれを論じた。では、個人の創作活動によって生み出される文学作品は民俗学の研究資料として利用できないのか。これまでに折口信夫^②やその弟子たち、例えば桜井満^③、池田弥三郎^④、三谷栄一^⑤、福田晃^⑥などは古典文学の民俗学的研究に積極的に取り組み、多くの業績を残している。彼らの研究の前提条件となっているのが、古典文学の成立基盤にその時代の歴史性や社会性、あるいはその時代に生きていた人々の精神性が反映されているとする認識^⑦である。これこそ古典文学を民俗学の研究資料とする場合に、共有されなければならない視座であろう。換言するならば、我々民俗学者は古典文学を分析することで、その作品に

登場する民俗の歴史性やその時代に存在した理由、およびその民俗を伝承していた人々の精神性を明らかにし、現在に伝承されている民俗の理解に役立てるのである。

こうした古典文学に対する研究態度は、折口信夫やその弟子たちばかりではなく、実は柳田國男の著作にも見ることができ。筑摩書房刊『定本柳田國男集』別巻五の総索引には、万葉集・今昔物語・日本霊異記・伊勢物語・源氏物語・土佐日記・方丈記・徒然草・竹取物語・平家物語などなど、多くの古典文学名が挙げられている。柳田國男も古典文学を民俗資料として利用していることが分かるであろう。

例えば、『枕草子』一〇三段「見苦しきもの」(以下、本稿ではテキストとして上坂信男・神作光一全訳注／講談社学術文庫版『枕草子』全三巻を用いるので、本文中に示す段数はこれに依る)に登場する「法

二〇一八年一月三十日受付

*江戸川大学 現代社会科学科非常勤講師 日本民俗学

師陰陽師の紙冠りして祓へしたる者」の「紙製の冠」が、現在の修験者たちが頭に被る「頭巾」となっているとしている。柳田は『枕草子』に登場する「紙冠」がやがて「頭巾」に変化した⁸⁾としており、民俗の連続性を『枕草子』の中に見出しているのである。

同じく一四六段「見るにことなることなきもの」では、植物の名前が列挙されている中にイタドリが登場する。イタドリはタデ科の多年草で、土手などに自生する。特に人目を引くような植物ではない。それなのに漢字で「虎杖」と表記するから、清少納言は「仰々しい」というのである。柳田國男はこの箇所を引用して、清少納言の生きていた平安時代にはすでにイタドリという植物名が使われていた証拠であると、植物の方言について考察している。⁹⁾

このように、柳田國男にしろ折口信夫にしろ、古典文学に造詣が深く、それらを民俗資料として活用している。作者の社会的地位や立場、あるいはその時代の歴史性などを考慮しながら用いることで、古典文学は民俗学の可能性を大きく広げてくれるであろう。¹⁰⁾ ただし、『枕草子』を民俗資料として利用することに慎重な態度を示している国文学者たち、例えば小森潔¹¹⁾・神尾暢子¹²⁾・原由紀恵¹³⁾などの意見にも耳を傾けておかなければならない。

二 「妙法蓮華經」と清少納言

『枕草子』には神道を始め、道教や儒教そして陰陽道など、多くの宗教関係の記述が見受けられる。中でも仏教は特に多く、清少納言の関心の強さを示している。『枕草子』に見える仏教関連記事を考察した民俗学者の松尾恒一は、平安時代の貴族女性たちと仏教との関係を捉える最良の資料のひとつとして同書を位置付けている。¹⁴⁾ 筆者もこの提言に誘われつつ、『枕草子』を用いて仏教と日本人との関係を明らかにしてみたい。¹⁵⁾ もちろん園山千里¹⁶⁾が指摘しているように、

『枕草子』に登場する仏教は、作者清少納言の眼を通して表象された仏教であることを考慮しておかなければならない。

仏教をその目的によって分類すれば、三つの相に分けることができる。ひとつ目は、悟りを得た覚者（仏）となることを目指す解脱志向（密教の即身成仏も含む）。これを説く經典の代表が「般若心經」である。ふたつ目は、死後に阿弥陀如来の居る極楽浄土への往生を目指す往生志向。これを説く代表的經典が浄土三部經である。みつつ目は、この世での幸福を願い、仏菩薩に自己の願望（欲）を叶えてくれるよう信仰する現世利益志向。これを説く代表的經典が「觀音經」である。清少納言は仏教のどの相に関心を持っていたのであろうか。

仏教関連章段の中でも法華八講については多くのスペースを割いている。そのため、これまでの『枕草子』研究の中で法華八講を取り上げた論稿は多い。¹⁷⁾ 法華八講というのは、鳩摩羅什が漢訳した「妙法蓮華經」（以下、「法華經」と略す）八卷二八品を四日間朝夕各一座ずつ、合計八座に分けて講義する法会のことである。ただし、基本は四日間八座であるが、必ずしもこの原則に従うわけではなく、十座や三十座で行われる場合もある。¹⁸⁾

では、法華八講は何を目的とした法会であったのか。このことに関しては、園山千里の研究によれば、死者の追善供養に加え、長寿を祝う算賀、生前の自己供養としての逆修、現世安穩、同朋同志の結びつきを強めるための同法結縁、さらに十世紀後半になると仏との縁を結ぶ結縁八講へと展開したとされている。『枕草子』に描かれた法華八講のほとんどが、この結縁八講であった。¹⁹⁾

以下、『枕草子』の中から法華八講など仏教に関する記述を抜き出して、清少納言が仏教に何を求めようとしていたのか確認することとしよう。なお、紙数の関係上、論旨の展開に必要な箇所のみを提示する。

三 一段「説經の講師は」

「『そこに説経しつ。八講しけり』など人のいひつたふるに、『その人はありつや』『いかゞは』などさだまりて言はれたる、あまりなり。などかは、むげにさしのぞかではあらん、あやしからむ女だにいみじう聴くめるものを。さればとて、はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。たまさかには壺装束などして、なまめき化粧じてこそはあめりしか。それに物詣などをぞせし。説経などには、ことにおほく聞(こ)えざりき。」

三二段「菩提といふ寺に」

「菩提といふ寺に、結縁の八講せしに、詣でたるに、人のもとより『とく帰(り)給(ひ)ね、いとそうくし』といひたれば、蓮の葉の裏に、

もとてもかゝる蓮の露をおきてうき世にまたはかへるものかと書きてやりつ。まことに、いとたふとくあはれなれば、やがて泊りぬべくおぼゆるに、さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。」

三三段「小白河といふ所は」

「小白河といふ所は、小一条(の)大將殿の御家ぞかし。そこにて上達部、結縁の八講し給(ふ)。世(の)中の人、いみじうめでたき事にて、『おそからん車などは、立つべきやうもなし』と言へば、露と、もに起きて、げにぞひまなかりける。(中略)朝座の講師清範、高座の上も光満ちたる心地して、いみじうぞあるや。暑さのわびしきにそへて、しきしたる事の、今日すぐすまじきをうちおきて、たゞすこし聞(き)て帰りなるとしつるに、しきなみにつどひたる車なれば、出(づ)べき方もなし。(中略)人して、『五千人のうちにいらせ給はぬやうもあらじ』と聞えかけて帰りにき。そのはじめより、やがてはつる日まで立てたる車のありけるに、人寄り来とも見えず、すべてたゞあさましう、絵などのやうにて過(ぐ)しければ、ありがたく、」

一二七段「故殿の御ために」

「故殿の御ために、月ごとの十日、経仏など供養せさせ給(ひ)しを、

九月十日、職の御曹司にてせさせたまふ。上達部・殿上人いと多かり。清範、講師にて、説く事、はたいと悲しければ、ことにもの、あはれ深かるまじき若き人々、みな泣くめり。」

二四九段「いみじうしたて、婿に取りたるに」

「六月に人の八講し給(ふ)所に、人々集りて聞きしに、」

以上、三卷本枕草子テキストから、法会の場合を抜き出して提示した。一二七段を除く四つの場面はいずれも法華八講である。一二七段は定子の父藤原道隆の命日に行われた追善供養である。道隆は長徳元年(九九五)四月十日に他界しているから、おそらく同年の九月十日だったであろう。講師として法相宗の清範²⁰が招かれている。どのような話をし、何の経を読んだのであろうか。「はたいと悲しければ、ことにもの、あはれ深かるまじき若き人々、みな泣くめり」とあることから推察すれば、人の世のはかなさや、死ぬことの意味などを説いたのであろう。

他の法会法華八講であるから、もちろん「法華経」の講釈が行われた。注意されるのは、女性の参列者について言及されていることである。三一段に見える「あやしからむ女」とは市井の女性であろうか。あるいは宮中に務める身分低い女房のことであろうか。三三段には、初日から最終日まで通い続けた女性のいたことが記されている。その女性を目撃していた清少納言も当然毎日通い続けたということになる。

清少納言の熱心さは、あちらこちらに見えている。三二段「いとたふとくあはれなれば、やがて泊りぬべくおぼゆる」とか、三三段「露と、もに起きて、げにぞひまなかりける」あるいは「しきしたる事の、今日すぐすまじきをうちおきて」といった表現を見れば、どれほど法華八講に心魅かれていたのが理解できよう。他の女性たちも同じ思いであつたろう。だとするならば、「法華経」のどのような教えに興味を抱いていたのであろうか。おそらく女人成仏を説く「提婆達

多品第十二」、あるいは観音菩薩の功德を説く「観世音菩薩普門品第二十五」であったと考えられる。

「提婆達多品」では、大悪人提婆達多が成仏できたのに続き、竜女の娘竜女の成仏を説く。その箇所を提示すれば次の通りである。

「その時、舍利弗は、竜女に語りて言わく『汝は、久しからずして、無上道を得たりと謂えるも、この事は信じ難し。所以はいかん。女身は垢穢にして、これ法器に非ず。云何んぞ能く、無上菩提を得ん。』」⁽²¹⁾（中略）

鎌田茂雄はこの一文を、「そこで舍利弗はその理由を明らかにする。女というものは、穢れているから仏に成れない者である。インドの昔には、女は男より劣っており、穢れたものとする見方があった。舍利弗はその常識を言っただけである。」⁽²²⁾と解説している。「提婆達多品」の続きを示せば次のようになっていいる。

「当時の衆会は、皆、竜女の、忽然の間に變じて男子と成り、菩薩の行を具して、すなわち、南方の無垢世界に往き、宝蓮華に坐して、等正覺を成じ、三十二相・八十種女子ありて、普く十方の一切衆生のために、妙法を演説するを見たり。その時、娑婆世界の菩薩と声聞と天・竜の八部と人と非人とは、皆、遙かに彼の竜女の、成仏して普く時の会の人・天のために法を説くを見、心、大いに歡喜して悉く遙かに敬礼せり」⁽²³⁾

この箇所も鎌田茂雄の解説を示すと、「大ぜいの人々は竜女の言葉聞いて目をこらした。すべての人々の目は竜女のすがたに凝集した。竜女のすがたはたちまちのうちに男子に変わった。女のすがたが男のすがたになった。男のすがたになった竜女は、菩薩となつて南方の無垢世界に行き、美しい蓮華の上に坐り、仏と同じ悟りを得て、仏の特殊をそなえ、一切の人々のためにすぐれた教えを演説した。」⁽²⁴⁾となる。

今確認した通り、「法華経」では女人成仏を説いてはいるのだが、

女性の身のままで成仏できるわけではない。一度男性に生まれ変わって後に悟りを得ることができる、と教えている。この変成男子の教えを、講師の清範はどのように解説したのであるか。そして、その解説を清少納言たち女性は素直に受け入れたのであろうか。

一九七段には「経は、法花経さらなり。普賢十願。千手経。随求経。金剛般若。薬師経。仁王経の下巻。」とあり、清少納言はかなり仏教經典を読んでいたようである。一〇一段には「大般若の読経ひとりしてはじめたる」とあり、解脱のための「空」の教えを説く般若經典を集大成した「大般若経」全六百巻についても知っていた。

こうしたことから、清少納言の仏教への関心は非常に高かったことが想像される。たびたび法華八講に参加していたのも、社交の場として捉えていたからではなく、本気で「法華経」を学びたいとする彼女の意志の表れと見なすことができよう。その証拠に三三段では、権中納言藤原義懷から言葉を掛けられた時、清少納言は方便品の内容を踏まえた返事を得意即妙に返している。一八三段では、女性の家から帰る男の諳んじた經典を、「法華経」第六巻と言いついでいる。いずれも清少納言が「法華経」に精通していることを示すエピソードである。

どうしてそれほどまでに、清少納言は仏教について詳しく知っていたのであろうか。もちろん群を抜く記憶力の持ち主であったことが理由のひとつではある。これに加えて身近に仏教関係者のいたことが指摘されている。永井義憲によれば、清少納言の親族に戒秀という名の僧侶がいて、その者の影響によるのではないかとという。⁽²⁵⁾ また後藤祥子は、実父清原元輔、そして定子の父藤原道隆と母高階貴子が帰依した宗教者に愛宕聖と呼ばれる者たちがいた⁽²⁶⁾のだとしている。

とにかく、清少納言は平安時代に生きたひとりの女性として仏教、とりわけ「法華経」に強い関心を持っていた。女人成仏を説く「提婆達多品」については先に示したので、次は観音信仰について説く「観

世音菩薩普門品」を見ておきたい。

三 観音信仰と清少納言

観音信仰²⁷⁾というのは、観音菩薩に帰依して種々の祈願をすることである。「無量寿経」あるいは「観無量寿経」では極楽往生を援ける観音菩薩の功德が説かれている。²⁸⁾ 法華八講で講説される「観世音菩薩普門品」(「観音経」)では、現世利益を叶えてくれる仏として描かれている。後に見るように現世肯定派の清少納言は、おそらく「観音経」を通じて観音信仰を獲得したのであろう。

「観音経」に説かれている観音菩薩は、人々の求めに応じて様々な姿に応現し、救済してくれる。このことから六観音・七観音・十五観音・二十五観音・三十三観音などの信仰が生まれている。この中で六観音というのは、六道世界で苦しんでいる衆生を救う六道拔苦の信仰から生まれた観音である。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天にそれぞれ、台密(天台系)では千手観音・聖観音・馬頭観音・十一面観音・不空羂索観音・如意輪観音を充て、東密(真言系)では不空羂索観音に代えて准胝観音を加える。七観音というのは、台密と東密の六観音を合わせた観音のことになる。

わが国に観音信仰が伝えられるのは飛鳥時代のこととされている。「観音経」の初見は『日本書紀』朱雀元年(六八六)の条で、天武天皇の病気に際し、平癒祈願のため「観音経」が諸寺院で講説されている。奈良時代になると、病氣平癒祈願といった個人的現世利益信仰に加え、鎮護国家といった国家的祈願に際して「観音経」が読誦されるようになる。清少納言が生きた平安時代に入ると、末法思想の広がりとともに極楽往生を願う気運が高まりを見せるようになる。その願いに応えたのが阿弥陀如来を救い主とする浄土教である。浄土教発展の中で、観音菩薩は阿弥陀如来の脇侍として祀られるようになり、人々

をあの世へと導いてくれる仏としても信仰されるようになった。その信仰を現在に伝えているのが六観音信仰であったり、東京都世田谷区奥沢の九品仏浄真寺に伝承されている来迎会(通称「お面被り」)などである。

このように、観音信仰は現世利益中心であったのが、そこに往生信仰が加えられて、この世とあの世との現当二世の救済者として、庶民層も含めた多くの国民に信仰されるようになったとされている。まずは、「観音経」の内容を確認しておこう。全文を紹介することは不可能であるから、必要な箇所のみ提示する。

A・若し百千万億の衆生ありて、金・銀・瑠璃・砗磲・瑪瑙・珊瑚・琥珀・真珠等の宝を求めんがために大海に入らんに、仮使、黒風その船舫を吹きて、羅刹鬼の国に飄わし墮しめんに、その中に若し乃至一人ありて、観世音菩薩の名を称えば、この諸の人等は皆、羅刹の難を解脱ることを得ん。²⁹⁾

B・若し女人ありて、設し男を求めんと欲して、観世音菩薩を礼拝し供養せば、便ち福德・智慧の男を生まん。設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女の、宿、徳本を殖えしをもて衆人に愛敬せらるるを生まん。³⁰⁾

Aの部分、金銀財宝を求めて船に乗り込んだ人々が嵐に遭遇した時、たとえ一人であっても観音菩薩の名前を呼べば、すべての人々が救われると説いている。世俗の欲である金銀財宝を求める心を、解脱志向の仏教は否定している。そのため鎌田茂雄は「『観音経』は現世利益を説いた通俗的なお経であると思われるが、実は『浅き深きなり』であつて、これほど宇宙の生命の用きを見事に解き明かしたお経はない」³¹⁾と弁明し、金銀財宝は仏道修行における七聖財³²⁾のこととしている。これに対して鎌田と同じく仏教学者である奈良康明は「わたしたちが現世利益を願う心情はあつて普通なのです」³³⁾と、経文の内容をそのまま現世利益として解釈することを認めている。

平安時代の法華八講において、清範たち講師はこの部分をどのような立場から説いたのか、あるいは奈良のように金銀財宝を求める欲を肯定する立場から説いたのだろうか。

Bの部分も現世利益を説いている。男児が欲しいと望む者には「福德・智慧」のある男児を、女児が欲しいと望む者には「端正有相」の女児を授けてくれるとしている。このことから観音菩薩は「子授け・安産・子育て」を見守ってくれる子安観音として信仰され、女性たちは観音講を組織して観音菩薩を信仰してきたのである。

それでは、いよいよ『枕草子』の中に描かれた観音信仰を抜き出して吟味することしよう。清少納言は、どのように観音信仰を受け取っていたのだろうか。

一九六段「寺は」

「寺は壺坂。笠置。法輪。石山。粉河。志賀。」

とてもすばらしく思われる寺院として六つの寺院名が挙がっている。まず最初に名前のある壺坂寺は、奈良県高市郡高取町にある真言宗豊山派寺院。千手観音を本尊として祀る西国三十三観音霊場の第六番札所。次いで笠置寺は京都府相楽郡笠置町にある真言宗智山派寺院で、未来仏である弥勒菩薩を本尊としている。平安時代から弥勒霊場として有名。三番目の法輪寺は、同名の寺院が奈良県生駒郡斑鳩町と京都市西京区嵐山にある。斑鳩町の法輪寺は薬師如来を本尊とする。元々聖徳太子の病氣平癒を祈願して建立されたと伝えられているが、講堂には平安時代の十一面観音菩薩を祀っている。古くは真言宗寺院であったが、現在は聖徳宗に属している。もう一方の嵐山にある法輪寺は真言宗御室派寺院で、虚空蔵菩薩を本尊とする。石山寺は滋賀県大津市にある真言宗御室派寺院で、如意輪観音を本尊として祀っている。聖武天皇の発願によって、東大寺の良弁が開いたと伝えられている。粉河寺は和歌山県紀の川市にある粉河観音宗本山寺院。元々は天

台宗に属していたが、第二次世界大戦後に独立して粉河観音宗を名乗るようになった。本尊は千手観音である。最後に名前の挙がっている「志賀」とあるのは、天智天皇によって現在の大津市に創建されたと伝えられている崇福寺（廃寺）で、本尊は弥勒菩薩であった。もちろん、こうした寺院全てを清少納言が参拝したかどうかについては不明である。

一九八段「仏は」

「仏は如意輪。千手。すべて六観音。薬師仏。釈迦仏。弥勒。地藏。文珠。不動尊。普賢。」

とても有り難く思われる仏菩薩として、如意輪観音と千手観音の名前をまず挙げている。それから「すべて六観音」とあり、先のふたつの観音を含めて六観音のすべてが有り難いとしている。ただし、不空罽索観音と准胝観音のどちらを含む六観音であるのか分からないので、台密系の六観音を指しているのか、あるいは東密系の六観音を指しているのかは不明。この後にふたつの如来名と四つの菩薩名、そしてひとつの明王名が続いている。

ここに列挙された仏菩薩名と、一九六段に示された寺院で祀られている仏菩薩名とを対比させると、如意輪観音を祀るのが石山寺、千手観音を祀るのが壺坂寺と粉河寺、十一面観音を祀るのが斑鳩町法輪寺、薬師如来を祀るのが斑鳩町法輪寺、弥勒菩薩を祀るのが笠置寺と現廃寺の崇福寺となっており、「寺は」と「仏は」とが見事に対応関係を示していることがわかる。つまり、「寺は」で名前の挙げられた寺院は、その景観や歴史・縁起によって選ばれたのではなく、祀られている仏菩薩によって選ばれたのである。このことから推測すれば、法輪寺は虚空蔵菩薩を祀る嵐山ではなく、薬師如来と十一面観音を祀る斑鳩町の方であろう。

以上論じてきたことから、清少納言が仏教の中でも特に観音信仰に関心を持っていたことが推測できよう。このことを裏書きするかのよ

うに、清少納言が参詣・参籠した場面の多くが十一面観音を本尊とする清水寺と初瀬（長谷）寺であった。一九六段に両寺院の名が見えないのは、他の段において再三取り上げているからであろう。九場面ある中で三二段の菩提寺と二二二段の太秦寺（広隆寺）を除く七場面（初瀬寺四場面、清水寺三場面）を抜き出してみよう。

三六段「池は」

「初瀬に詣でしに、水鳥のひまなくゐて立ちさわしが、いとをかしう見えしなり。」

一〇七段「卯月のつごもりがたに」

「卯月のつごもりがたに、初瀬に詣で（て）、淀の渡りといふものをせしかば、」

一一三段「正月に寺にこもりたるは」

「正月に寺にこもりたるは、いみじく寒く、雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨うち降りぬるけしきなるは、いとわろし。清水などに詣で、局するほど、呉橋のもとに車ひきよせて立てたるに（中略）鐘の声響きまさりて、いづこのならんと（思ふほどに、やんごとなき所の名うちいひて、『御産たひらかに』など、験々しげに申したるなど、すずろにいかならんなど）おほつかなく念ぜらるかし（中略）七つ八つばかりなる男児の、声愛敬づき、おごりたる声にて、侍の男どもの呼びつき、物など言ひたる、いとをかし。また三つばかりなる乳児の寝おびれて、うちしはぶきたるもいとうつくし。乳母の名、母など、うち言ひ出（で）たるも誰ならんと知らまほし（中略）二月晦日、三月ついたち、花ざかりに籠りたるもをかし。清けなる若き男どもの、主と見ゆる二三人、桜の襖、柳などいとをかしうて」

二二三段「九月二十日あまりのほど」

「九月二十日あまりのほど、初瀬に詣で、いとほかなき家に泊りたりしに、いと苦しくて、たゞ寝に寝入りぬ。」

二二四段「清水などにまゐりて」

「（清水などにまゐり）て坂もとのぼるほどに、柴たく香の、いみじうあはれること、をかしけれ。」

二二六段「清水にこもりたりしに」

「清水にこもりたりしに、わざと御使して、賜はせたりし唐の絵の赤みたるに草にて、」

一本二七段「初瀬に詣でて」（参考）

「初瀬に詣で、局に居たりしに、あやしき下臍どもの、うしろをうちまかせつ、居並みたりしこそねたかりしか。いみじき心起こしてまゐりしに、川の音などの恐ろしう」

このように、清少納言は一年を通じて、たびたび初瀬寺や清水寺に参詣・参籠している。一一三段に「御産たひらかに」とあり、目的のひとつは安産祈願であった。子安信仰の民俗として重要である。「やんごとなき所の名」とあるから、清少納言自身の安産祈願ではない。永井義憲は一条天皇の皇太子であった居貞親王（後の三条天皇）の皇子敦明親王（正暦五年五月九日誕生）の安産祈願であったのではと推定している。⁽³⁴⁾ もしかしたら、長徳二年十二月十六日に誕生した中宮定子の第一皇女脩子内親王の無事を祈るためであったのかも知れない。また、七、八歳の男児や三歳ほどの乳児を連れた人たち（母や乳母）は、子育て祈願に参籠しているのである。「いみじき心起こしてまゐり」とあることから、単なる物見遊山の参詣・参籠ではなかったのである。

四 おわりに

古典文学の中から『枕草子』を取り上げて、その中に描かれた仏教関係の場面を抜き出し、これに考察を加えてきた。

清少納言は仏教の何に心魅かれていたのであろうか。清少納言が「大般若経」を始めとする多くの仏教経典を読んでいたことは、一〇一段

および一九七段によって明らかである。数ある經典の中から「法華經」の名を一番に挙げていることや法華八講に足繁く参列していることから、女性と深く関わりのある「法華經」の第十二品「提婆達多品」と第二十五品「觀世音菩薩普門品」を取り上げて分析してみた。

「提婆達多品」には女人成仏が説かれている。女性も悟りを得て仏の境地に到達することができるとする教えである。この解脱志向こそが仏教の究極的目的だとされているのだが、『枕草子』の中に解脱の具体的教えである「空」にまつわる話や悟りを得ようとする話は一切描かれていない。

解脱するためには人間の心を束縛している世俗的欲から解放されなければならぬのだが、清少納言が求めていたものはその逆である。一八〇段「位こそ、なほめでたきものはあれ」に象徴されるように、清少納言にとって家柄・身分・地位などこそが、人間の良し悪しを計る尺度となっているし、人間の幸福を左右する条件と考えている。二三段「すさまじきもの」の中に「除目に司得ぬ人の家」、二二段「生ひ先なく」の中に「生ひ先なく、まめやかにえせざいはひなど見ておたらん人は、いぶせく、あなづらはしく思ひやられて」、二三〇段「身をかへて」の中に「身をかへて天人などはかうやあらんと見ゆるものは、たゞの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる。(中略) 雑色の、藏人にな(り)たる、めでたし。去年の霜月の、臨時の祭に御琴持たりしは、人とも見えざりしに」などは、家柄・身分・地位こそすべてであるとする清少納言の価値観を示している。このような価値観を解脱志向の仏教は否定しているのである。清少納言の場合、父清原元輔が学者としての高い才能を有していながら、家柄故に従五位肥後守の地位にしかなれなかったから、人一倍家柄などにこだわっていたのかも知れない。

こうした世俗的欲を叶えてくれる仏こそ観音菩薩であった。法華八講において「觀世音菩薩普門品」が講釈された時、現世利益の有り難

い仏として観音菩薩の信仰が説かれたことであろう。だからこそ清少納言は一九八段「仏は」において観音菩薩の名を第一に挙げたのであり、観音菩薩を祀る初瀬寺や清水寺へ参詣・参籠を繰り返したのである。

『枕草子』に見える仏教の相は現世利益であり、解脱志向の相については一切語られていない。もうひとつの相である往生志向についてはどうであろうか。永井義憲が『枕草子』には往生志向の核となる阿弥陀仏の名前が登場しないことを指摘している。³⁶⁾ 確かに、一三段「峰は」の中に「阿弥陀の峰」とはあるけれども、極楽浄土の教主としての阿弥陀如来は一切語られていない。そればかりか、葬送儀礼³⁶⁾や墓参りそしてあの世(来世)などについても、一二七段「故殿の御ために」を除き、ほとんど登場しないのである。同時代を描いた『栄花物語』³⁷⁾には、村上天皇妃安子から始まり、村上天皇・定子の父藤原道隆・定子の叔父道兼・定子の母高階貴子・定子本人・一条院と、その臨終・葬送・法要の場面が詳しく記されているのとは対照的である。

清少納言が阿弥陀如来について触れていない理由を、永井は彼女が時代的に浄土思想に十分接していなかったからであると見ている。はたしてどうであろうか。七六段「御仏名のまたの日」では、地獄変相図を無理強いさせられそうになったり、九五段「御かたぐ」では、極楽浄土の九品について定子に即答したり、一六一段「遠くて近きもの」では、第一番目に極楽を挙げている。さらに六三段「草は」では、「蓮は、よろづの草よりもすぐれてめでたし、妙法蓮花のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠につらぬき、念仏して、往生極楽の縁とすればよ」とある。これらのことからして、清少納言もかなり浄土思想については学んでいたようである。それにも関わらず、『枕草子』に阿弥陀如来の名前が登場しないのは、清少納言が極楽往生に関心を有してはいたものの、本気で信じていたわけではないからであろう。

九五段で「九品蓮台の間には、下品といふとも」(極楽往生できるのであれば、下品でも構わない)と言っているのは、あくまでも喩えである。「観無量寿経」によると下品下生に往生するのは「生ける者どもの中で、不善な行為である五逆罪と十種の悪行を犯し、(その他)さまざまの不善を行ない、このような悪しき行為の結果、悪しき道に堕ち、長い間くり返しくり返し苦悩を受けて止むことのない愚かな者」⁽³⁸⁾とあるのだから、プライドの高い清少納言がそれを信じるはずもない。

清少納言が仏教に求めたのは現世利益であり、現代日本人と変わらない。筆者の民俗調査の経験から判断して、仏道修行者などの一部を除き、悟りを得て覚者(仏)の境地に到ることを目指している日本人などひとりもない。毎日朝晩欠かさず「南無阿弥陀仏」と念仏を唱える老人は多いが、死後に自分の魂が十萬億土彼方の西方極楽浄土へ旅立つと、本気で信じている人はほとんどいない。民俗学では言い古されたことであるが、もし極楽往生を信じているのであれば、墓など造る必要もないし、年忌供養を営む必要もないのである。三八段「花の木ならぬは」に死者の魂が大晦日にこの世へ帰って来ることが描かれているように、現在でもお盆になると墓や山や海から先祖の魂を迎えている。だが、極楽浄土から先祖が帰って来ると信じている人はいない。

註
インターネットを通じて入手した論稿に関しては、その末尾に(電子版)と明記した。

- (1) 高見寛孝「シャーマニズムの視座から『遠野物語』を読む」『二松學舎大学人文論叢』九九・二〇一七年
- (2) 折口信夫による古典文学の民俗学的研究は、代表作「口訳万葉集」(全集四巻・五巻)を始めとして、非常に数が多い。「枕草紙解説」(全集十巻)など、その全容については中央公論社刊「折口信夫全集」を参照していただきたい。
- (3) 桜井満「万葉集の民俗学的研究」桜楓社 一九九五年
- (4) 池田弥三郎「文学と民俗学」岩崎美術社 一九六六年

- (5) 三谷榮一『日本文学の民俗学的研究』有精堂 一九六〇年

『古典文学と民俗』岩崎美術社 一九六八年

『物語文学の世界』有精堂 一九七五年

『物語史の研究』有精堂 一九六七年

『物語文学史論』有精堂 一九六五年

- (6) 福田晃「軍記物語と民間伝承」岩崎美術社 一九七二年

- (7) 三谷榮一「前掲『古典文学と民俗学』二ページ

長谷川政春「巫女から女房へ」『文学と民俗学—日本民俗研究大系九』國學院大學 一九八九年 三二—三三ページ

福田晃「前掲『軍記物語と民間伝承』二七ページ

なお、「民俗主義文学論」を提唱した小山勝清は、柳田國男の著作を読む場合には「柳田氏の思想感情を通じて祖先の生活、感情、思想の曲折をよみとる」としており、古典文学の民俗学的研究に通じる考えを示している。

松村友祝「小山勝清『民俗主義文学論』(緒論)—復刻・解題—」『藝文研究』五五(電子版) 一九八九年 一一六ページ

柳田國男の弟子となりながら、その自由奔放な性格ゆえに破門された小山勝清の生涯については次を参照。

高田宏「われ山に帰る」岩波書店 一九九〇年

- (8) 柳田國男「巫女考」『定本柳田國男集』九 筑摩書房

- (9) 柳田國男「野草雜記」『定本柳田國男集』二二 筑摩書房

(10) 本文中には取り上げることができなかったが、国文学者たちによるすぐれた「枕草子の民俗学的研究」を見ることができ、いずれも我々民俗学者にとって有意義である。

田中新一「枕草子『をふさの市』について」『稻山国文学』二〇(電子版) 一九九六年

西山秀人「枕草子」地名類聚章段の背景「上田女子短期大学紀要」十七(電子版) 一九九四年

片平博文「枕草子」にみる平安京郊外への道「日下雅義編『地形環境と歴史景観』古今書院 二〇〇四年

池添博彦「平安朝の食文化考—『枕草子』について—」『帯広大谷短期大学紀要』三九(電子版) 二〇〇二年

津島知明「中宮・定子の『出家』と身体」藤本勝義編『王朝文学と仏教・神道・陰陽道』竹林舎 二〇〇七年

小野恭靖「平安文学と風俗園歌謡」堀淳一編『王朝文学と音楽』竹林舎 二〇〇九年

小森潔「女房日記の音楽・舞楽」堀淳一編『王朝文学と音楽』竹林舎 二〇〇九年

中島和歌子「『枕草子』の五月五日」小森潔他編『枕草子—創造と新生—』翰林書房 二〇一二年

小山利彦「枕草子 賀茂の郭公考」上・下『専修国文』五〇・五二 一九九二年・一九九三年

- 坏美奈子『源氏物語』と『枕草子』の〈七夕〉『古代中世文学論考』二五
 新興社 二〇一一年
 原由来恵『「枕草子」における伝承』『古代中世文学論考』三 新興社
 一九九九年
 原由来恵『三卷本「枕草子」市は』章段について『二松學舎大学人文論叢』
 七四 二〇〇五年
 原由来恵『三卷本「枕草子」社は』章段再考『二松學舎大学人文論叢』
 七七 二〇〇六年
 (11) 小森潔『「枕草子」の人生儀礼と通過儀礼』小嶋菜温子編『王朝文学と通
 過儀礼』竹林舎 二〇〇七年 一五八ページ
 (12) 神尾暢子『「枕草子」の地名』倉田実他編『王朝文学と交通』竹林舎
 二〇〇九年 四一ページ
 (13) 原由紀恵『「枕草子」地名類聚』章段について 今西幹一編『二松學舎創
 立百三十周年記念論文集』二〇〇八年 五五ページ
 (14) 松尾恒一『「枕草子」に見る平安仏教』兩宮博洋他編『枕草子大事典』勉
 誠出版 二〇〇一年
 (15) 『「枕草子」を資料として日本人の靈魂觀を考察した最近の研究に大本敬久
 の論稿がある。』
 大本敬久『魂祭の歴史と民俗』『国立歴史民俗博物館研究報告』一九一(電子
 版) 二〇一五年
 (16) 園山千里『「枕草子」の宗教関連章段考―仏事の声を中心に』小森潔他編
 前掲『枕草子―創造と新生』五六ページ
 (17) 池田正俊『「枕草子」と仏教信仰』『和洋国文研究』八 一九七二年
 今成元昭『法華八講の△日▽と△時▽』伊藤博之他編『唱導の文学』勉誠社
 一九九五年
 永井義憲『枕冊子の仏教的环境』『日本仏教文学研究』第二集 豊島書房
 一九六七年
 園山千里『「枕草子」と「結縁八講」』『古代中世文学論集』二五 二〇一一年
 園山千里 前掲『「枕草子」の宗教関連章段考―仏事の声を中心に』
 津島知明『亀裂に果食う八花山院▽「枕草子」小白川』と「菩提寺」の風景』
 『古代中世文学論集』二七 二〇一二年

- (18) 今成元昭 前掲『法華八講の△日▽と△時▽』五五ページ
 (19) 園山千里 前掲『「枕草子」と「結縁八講」』
 (20) 池田正俊 前掲『「枕草子」と仏教信仰』一二二ページ
 (21) 坂本幸男他訳注『法華經 中』岩波書店 一九六四年 二二二ページ
 (22) 鎌田茂雄『法華經を読む』講談社 一九九四年 二一〇～二二二ページ
 (23) 坂本幸男他訳注 前掲『法華經 中』二二四ページ
 (24) 鎌田茂雄 前掲『法華經を読む』二二二ページ
 (25) 永井義憲『清少納言の信仰』前掲『日本仏教文学研究』第二集 二五二
 (二五三ページ)
 (26) 後藤祥子『「枕草子」』『国文学解釈と鑑賞』五六―五 一九九一年 五八―
 七二
 (27) 鎌田茂雄『観音經講話』講談社 一九九一年
 鎌田茂雄『観音のきた道』講談社 一九九七年
 瀬戸内寂聴『寂聴 観音經』中央公論社 一九九〇年
 奈良康明『観音經講義』東京書籍 一九九七年
 速水侑『観音信仰』塙書房 一九七〇年
 (28) 中村元他訳註『浄土三部經』上・下 岩波文庫 一九六三年・一九六四年
 (29) 坂本幸男他訳註『法華經 下』岩波書店 一九六七年 二四四ページ
 (30) 同右 二四八ページ
 (31) 鎌田茂雄 前掲『法華經を読む』三七四ページ
 (32) 鎌田茂雄 前掲『観音經講話』六二二ページ
 (33) 同右 六四四ページ
 (34) 永井義憲『枕冊子と長谷寺』『日本仏教文学研究』第一集 豊島書房
 一九六六年 三二三ページ
 (35) 永井義憲 前掲『清少納言の信仰』二四九ページ
 (36) 小森潔によれば『「枕草子」は人生儀礼を拒否しているという。
 小森潔 前掲『「枕草子」の人生儀礼と通過儀礼』一五九ページ
 (37) 山中裕他校注・訳『栄花物語 新編日本古典文学全集』小学館
 一九九五年
 (38) 中村元他訳註『浄土三部經』下 岩波文庫 一九六四年 三九ページ